説教20210124　ネヘミア8：8-10　ルカ4：14-21　Ⅱ1　246　217

「言葉が実現するとき」

キリストよお越しください、弟子たちの中に立ち復活のみ姿を顕されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

主の恵みの年、主イエス様がイザヤ書を朗読されて示されました、この主の恵みの年というのは５０年に一度訪れました。ヨベルの年とも言います。ヨベルとは雄羊の角のことで、それで作られたラッパを吹きならして、その喜びの年の到来がイスラエルに告げられたからです。

　５０年に一度の特別な年、というのは実に絶妙なタイミングではないでしょうか。人一人では、その年に出くわすことが出来るか、出来ないかといったといった出来事でありましょうし、当然、この５０年に一度の特別な年のことを子孫に語り継いでいくことが必要になるのです。主なる神は、このヨベルの年の喜びを人一人に留まることとせず、人々が共有していくこととして私たちにお与えになろうとしているのです。

　この５０年というのは７年ごとに訪れる安息年の7倍である４９年の次の年に当たります。安息年というのは７日ごとの安息日が拡大したもので、その安息年には土地を休ませ、奴隷を開放し、負債の免除なども行われました。このようにして、神の作られた人間の元の姿に、社会を戻されようとした神の配慮がみられる年です。５０年目のヨベルの年というのはその安息日の神の配慮が完成する年とも言えるでしょう。

　さて、５０年ごとにやってくるこの恵みの年というのは、時の移ろいを考察する上でのメルクマール、道しるべになったことと思います。と言いますのは５０年もたてば世の中の有様や常識が変わってしまい、昔と今とを比較する必要があるからです。そして５０年を単位に１００年、２００年、１０００年とさかのぼって、その変化を見ていくことも出来ます。

主イエスがこの日、ナザレで主の恵みの年を示された時、実際捕らわれている人が解放され、圧迫されている人が自由にされる政治が行われていたかというと、事実はその逆であったでしょう。なぜなら当時はヘロデという悪い王様によって政治が行われるようになっていたからです。

　又５０年という歳月は私たち人間を内側からも変えていくようです。このことは身近な例で説明しますと、江戸時代の１６５０年に「おかげまいり」と言って日本各地の群衆が伊勢神宮への参拝に出かけて、おかげ様で、道中、道々でのお恵みによって、貧しい人も旅費を心配することなく、その旅路を楽しむことが出来たという事です。その喜びがますます拡大して、誰もかれも伊勢神宮へと誘われ、その年は特別の恵みの年と化したようです。この「おかげまいり」はほぼ６０年という周期を描いてそれから明治時代まで続いたのです。

　さて、今の私たちは旅行に出て、このように道々恵まれるという喜びを忘れているのではないでしょうか。それは今は新型コロナ渦で旅行に出られないという意味ではありません。私たちが恵まれるという事の本当の姿を忘れているのではないかという事です。恵みというが段々と世の中から薄くなってきた様子は、明治時代、１８９０年のおかげまいりの際の次のような新聞記事からも読み取れます。「おかげまいりと言って、今年は諸国から伊勢参宮する信者すこぶる多い中で、昔も今もおかげまいりは道中一切お布施にてビタ一文費やさずに参詣できることと思い、ふところ無一文にて飛び出せし輩もあるよしなるが、何か世知辛い世の中にてそうはいかず、かえって道中の茶屋、はた小屋に、ふところを魚の目タカの目で狙われ、乞食同様となって、ほうほうのていで帰国する連中も少なからずとのこと[[1]](#footnote-0)」と記されています。明治時代には貧しいものに施しをするという行いをも、自立心をそぐとして禁止する法令が政府から発せられた[[2]](#footnote-1)くらいですので推して知るべしですが、このように、この世の中というのは富が増えれば、同時に恵みも増してくるというわけにはいかないようです。

　さて主イエスはガリラヤ地方から伝道を開始されました。主イエスの生まれ育ったナザレの街もガリラヤに属しています。ガリラヤは異国との交流も盛んで、進取の気性に富み、絶えず新しい影響を受けている、イスラエルでも最も保守性の薄い地方でした。ヨハネ福音書の、「メシアはガリラヤから出るだろうか」という言葉をご存じでしょうか。メシアはガリラヤなどからではなく、もっと保守的で伝統が守られているベツレヘムから出る、と考えるのが一つの常識だったのです。

　私たちは、このような伝統的ではない新しい街で、主イエスが主の恵みの年を告げられたことに注目したいと思います。申し上げました通り、主の恵みの年というのはイザヤ書に記されている通り、５０年前も１００年前も２００年前も、２０００前も、その姿は変わることはありません。それは「目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にする」主の恵みの年なのです。しかし、私たち人間のほうはと言えば、同じではありえない。年々変化していっているのです。歳歳年年人同じからず、と言いますが、その人や社会の変化は起こるべくして起こるのではないでしょうか。そしてその変化が悪い方向へ向かっていると予感されるとき、私たちは旧来の伝統や慣習にしがみつこうとするのではないでしょうか。

今、伝道を始められた主イエスは、当初預言者の一人とみんなから思われたことでしょう。イエスという一人の預言者が、各地の会堂を回られて教え始められました。それは霊の力に満ちたもので、たちまちその評判が地方一体に広まり、主イエスは全員から尊敬を受けられたという事です。

　イエスのこの伝道は、今までの預言者たちの伝道とははじめから違ったものだったのではないでしょうか。主イエスは旧約聖書に書かれてあることを教えていたのは間違いありませんが、その説き方は、決して旧来の伝統や慣習にしがみつこうとするものではありませんでした。そのような主イエスに対して、会堂に居る全ての人の目が注がれたとあります。主イエスはイザヤ書に書かれた何百年も前の主の恵みの年のことを告げられたのだけれども、そのお話は決して、古臭い昔の話ではありませんでした。むしろ、新たな主の恵みの年の到来を告げる新しい出来事として受け止められたことでありましょう。

　イエスの話を聞いたすべての人は、この時、常に新しいことを受け入れている自分たちに希望を持たせてくれるイエスの姿に、熱いまなざしを注いだのだと思います。

　今日読まれました旧約聖書は、紀元前６世紀に祭司エズラがイスラエルの民たちに律法の書、すなわち旧約聖書を読み上げ、一つの宗教改革を成し遂げた時のことが記された箇所ですが、ここではそれを聞いた民たちはみな泣いていたと言います。感極まって泣いたのでありましょう。そん民たちに対してエズラは「泣いたりしてはならない、行ってよい肉を食べ、甘い飲み物を飲みなさい。その備えのない者には、それを分け与えてやりなさい。」と言います。「その備えのない者には、それを分け与えてやりなさい。」というのは安息年に行うべき施しとして申命記に記されている事柄です。

　主イエスが現れるまで、民たちはこのように泣いたり笑ったりを繰り返し、主の恵みの年に立ち返ろうとしていたのではないでしょうか。しかし、なかなか主の恵みの年は実現せず、空しくその年は５０年ごとに繰り返され続けたのではないでしょうか。殊に、このヘロデ王の統治下にあっては、彼の巧みな政治によって、人々は真の恵みという事から遠ざけられていたのではないでしょうか。

　５０年ごとに主の恵みの年を、民たちにお与えになり、その恵みを体験させるという父なる神の配慮は、まことに喜ばしく、時代を超えて、私たち人間が、最初にあった主なる神の恵みに立ち返り主の平和に入れられるにふさわしいご配慮です。

　しかし、主イエスがこの地に下って、み言葉を語り始められた時、このようにイザヤショが読まれて、主の恵みの年が告げられたのでした。それは全く新しい時代の到来です。そうして主イエスは「この聖書の言葉は、今日、あなたが耳にしたとき実現した」と話し始められました。今迄は５０年に一回訪れていた主の恵みの年が、今ここに、その到来を耳にしたことで実現したというのです。私たちはこの成り行きを思いめぐらすとき、まことの恵みという事が、５０年とか２０００年とかいう時を超えて、与えられるものであることに気づくでしょう。

聖書が説く、主の恵みは天地創造のはじめから変わることがなく、それは５０年ごとの節目を経て告げられてきたのに、私たちが、その恵みにあずかることが出来ない理由は何でしょうか。それは一つには、今まで見てきましたように私たちがその主の恵みを、見えないようにされてしまっているからでしょう。

　主なる父なる神の恵みは、そのような私たち人間を救おうとされて私たちの前に差し出されました。それは何だったかというと、父なる神が最愛の独り子を私たち人間のところに下されて、聞くことが出来るようになったそのみ言葉です。

「この聖書の言葉は、今日、あなた方が耳にしたとき実現した」というみ言葉を信じる者は恵まれます。しかもその恵みというのは、体がよみがえり、とこしえの命が与えられるという事です。

　エマオへ帰る道すがらで、蘇られた主イエスと語り合った２人のことを思い起こしてみましょう。（この絵は松岩教会、、）はじめ二人は旧約聖書をつまびらかに説明される主イエスのことが主イエスだとは分かりませんでした。しかし、そのような物分かりの悪い二人に対して主イエスは、御自分のことである旧約聖書の内容を説明されたのです。そんな二人が後で宿屋の中でイエスが見えなくなってから彼こそイエスだったと悟ったとき言った言葉は次の様でした。「道で話しておられるとき、又聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」

このように私たちもイエスの言葉に触れ、イエスに触れるとき、私たちの心は燃え立つでしょう。そして変えられるでしょう。その時、昔から告げられてきた主の恵みの年は、私たちが触れられることとして、今、ここに実現するのです。私たちはこのように、はじめからある主の恵みが時代を超えて場所を超えて、主イエスの言葉によって、主イエスに触れることによって実現されることを知っています。

　ただし、私たちが口を閉ざしていては、その恵みが周りに拡がっていくことはないのです。私たちは主イエスから託されたこの上ない喜ばしく光栄なこの業を、この世にあって日々果たして参りたいと願います。

祈ります

天に居ます

今日、主の恵みの年が告げられ、聖書の言葉が実現されました。私たちは５０年を、この時に、この時を永遠に変えて下さるみ言葉を信じ、御言葉によって心を燃え立たせられ、新たな命に生きていくことが出来ますように。

主イエスの力強い聖霊は私たちを全ての圧迫から開放して下さいます。どうか私たちを聖霊で満たし、悩み苦しみの多いこの世にあって、世の光として働くことが出来るようにしてください。

主の計り知れない恵みは絶えずこの地上に注がれていますが、私たちの頑なにされた心はそれを受け取ることが出来ないでいます。どうか私たちの心を柔らかくして、あなたの永遠の恵みを受け取ることが出来るようにしてください。

殊に今、人々の間に様々な隔ての壁が築かれておりますが、どうかあなたの恵みのみ言葉によってそれを取り去り、私たちが柔和、謙遜、従順、の内にこの世を歩んでいくことが出来ますように。

この別府不老町教会の信徒たちをお守りください。創立に関わった方々は今は世を去り、主のお守りのうちにおられますが、その方々と共に私たちも主イエスの復活のみ国の喜びへと導いてくださいますように。

父と聖霊と共に

1. 牧原憲夫『客文と国民のあいだ』ｐ．184 [↑](#footnote-ref-0)
2. 紀田順一郎『東京の下層社会』ｐ．97 [↑](#footnote-ref-1)